

神奈川県相模原市

大日野原遺跡 2010 年度発掘調査概報



2010 年 3 月 31 日

中央大学文学部 小林謙一

大日野原遺跡（相模原市 No.465）の発掘調査実施概要

1. 遺跡の名称
大日野原遺跡（県遺跡番号：相模原市 No.465） 相模原市緑区澤井ケッサイコ 748
2. 発掘調査実施組織
中央大学文学部（文学部長 河西良治、調査担当者 日本史学専攻小林謙一）
3. 発掘調査の概要
2010 年度は、2010 年 8 月 2 日から 8 月 13 日において現地発掘調査を行った。 縄文時代中期の竪穴住居を 7 基以上確認し、うち 3 基について調査中を行った。 縄文時代中期勝坂式・曾利式・加曽利 E 式土器および石器が天箱 3 箱分出土した。 また、土坑に伴う埋設土器 2、住居に伴う埋甕 1、石囲埋甕炉 1 を確認している。
4. 発掘調査の体制
中央大学文学部日本史学専攻准教授 相模原市立博物館学芸員 テクノシステム（株） 中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士前期課程 中央大学文学部・考古学研究会、首都大学東京・國學院大学・立正大学 三重大学学生・院生 31 名、相模原市立博物館ボランティア 8 名
小林謙一 河本雅人 永田悠記 矢嶋良多
5. 出土品等整理計画の概要
調査終了後に中央大学において実施中である。
6. 報告書刊行予定時期・出土品の取り扱い
引き続き調査が継続されるため、報告書は成果がまとまり次第刊行予定である。出土物は、整理作業中は中央大学で保管し、整理作業終了後は相模原市に移管する。
7. 発掘調査成果概要
遺構確認（縄文住居跡 7 基以上、性格不明遺構 1 基） 遺物（縄文土器（中期勝坂式・曾利式・加曽利 E 式）、石器、古代土器）
8. その他・特記事項
平成 22 年度科学研究費補助金（基盤 C）「炭素 14 年代による縄文集落の研究」（代表小林謙一、課題番号 22520774、2010～2012 年度）による学術調査である。 相模原市立博物館（考古部会・大日野原遺跡の研究）の調査協力を得ている。

大日野原遺跡（相模原市 No.465）の発掘調査の経緯と成果

1) 調査の目的

日本考古学では、炭素 14 年代測定の結果を年代的位置づけに取り入れることについて、いまだ十分な評価がなしえないような状態である。世界史的な視野の中に日本先史時代を位置づけるためには、縄紋時代の炭素 14 年代測定研究を進めることは、緊急の課題である。

縄紋時代の集落研究は、土器編年研究と並び、日本先史考古学の大きな柱となってきたが、その内容は決して十分な成果とは言えない。高度成長期による大規模開発に伴う広域調査により、集落調査例は膨大なものとなったが、かえってその実体については不明確となり、特に最も遺跡数が多く集落も多く発見されている東日本縄紋中期についてみると、同時存在住居の把握や集落の定住性について、異論が続いている。同一の集落例を指して一時期に 100 軒の集落が長期に定住と考える研究者と、1 時期には 1 軒しかなく短い期間で移動とする研究者が、実証的な研究に立ち返ることなく、仮定に基づいた縄紋社会像を組み立てようとしている。膨大なデータとなった集落調査例を集成すると同時に、集落の内容をどのように時期区分するかを検討しなくてはならない。そのために、科学研究費補助金によって、縄紋遺構・集落の年代研究を行うこととした。

具体的には、縄紋時代中期住居の構築・使用・廃絶・埋没・再利用の考古学的コンテキストごとに、合計数十点の試料を現地で観察しながら採取して、土器付着物・伴出炭化物の炭素 14 年代測定を行い、暦年較正年代を算出し、統計的に処理することで、遺構ごとの継続期間を明らかにしたい。同時に、竪穴住居の居住や廃棄後の埋没期間などのライフサイクルに関わる年数を検討したい。そのために、縄紋中期集落の良好な遺存が期待できる相模原市大日野原遺跡の住居の調査を行い、竪穴住居ライフサイクルを明らかにしつつ、年代測定用試料を採取したいと計画した。そのための予備調査として、2008 年度は縄紋遺構の確認を目的としたトレンチ調査を行った。2009 年度はその成果を踏まえ、発掘面積を広げ、住居址の確認を行った。2010 年度は竪穴住居の掘り下げを行うことを大きな目的として調査した。

2) 調査経緯

2007～2009 年度より実施した科学研究費補助金基盤 C「炭素 14 年代を利用した縄紋時代の住居期間の研究」（課題番号 19520662）の考古学的調査の一端として、相模原市大日野原遺跡の発掘調査を 2008 年度より行っている。その際、2008 年 7 月に相模原市教育委員会と中央大学文学部との間で「大日野原遺跡の共同調査に関する協定書」を取り交わし、協力して調査を行うこととした。具体的な調査地点は、以前に旧藤野町が 1987 年に調査を

行い、古代の住居跡を調査し、縄文時代の住居が確認されている地点（藤野町 1995）の近隣部を対象とすることとし、地主の遠藤厚子氏の発掘調査承諾書を得た。また、周辺住民・農地所有者、相模原市役所藤野支所の協力を得た。2008 年度は、遺存状態のよい縄文中期竪穴住居の広がりの確認、2009 年度は SI-01 の全体のプランを確定すると共に、他の住居跡との新旧関係を把握することを目的として調査し 4 基以上の重複する住居群を確認するなど一定の成果をおさめた。ついで 2010 年度より科学研究費補助金 C「炭素 14 年代測定による縄文集落の研究」（課題番号 22520774）における調査として 2010 年度には竪穴住居跡 3 基の掘り下げ調査を行うこととした。あわせて中央大学における考古学教育の一環とするために中央大学文学部が調査主体となり、調査担当者は上記科学研究費の研究代表である中央大学文学部日本史学専攻の小林謙一准教授が調査担当とすることとして、埋蔵文化財保護法 92 条第 1 項に基づく発掘調査の届けを 7 月に行い、受理を受けた。

現地調査は以下の日程で行った。

2010 年 8/2 現地調査開始、8/13 片づけを行い、2010 年度調査とした。なお、8/8 午後には現地説明会を行った。また、8/6 には、藤野公民館により発掘体験教室が行われ、子供たちが発掘を体験する行事に協力した。

3) 調査参加者・協力者

調査参加者

小林謙一（中央大学）、河本雅人（相模原市立博物館）、永田悠記（テクノシステム（株））、矢嶋良多、山中菜生、丸山聡子、小澤政彦、岡野公彦、新井翔太、佐藤優、大西勝晶、浅野美幸、滝島あずみ、白畑里沙、下村冴香、野中大亮、高桑佑輔、高見優一、松山功祐、村木朱門、池上拓摩、山田英就、中西樹生、新内谷早紀、市村美由紀、岩崎明日香、関根崇、小倉達也（中央大学）、千葉毅（神奈川県立歴史博物館）、平野哲也、高橋智也（國學院大学）、橋本望（首都大学東京）、味噌井拓志、脇田大輔（三重大学）、小野寺純也（立正大学）、小林尚子（セツルメント研究会）、市川憲子、鹿山茂樹、神垣真理子、樽林亨、千葉宗嗣、西本志保子、村上金四郎、守屋之栄（以上相模原市立博物館ボランティア）

調査協力者（順不同、敬称略）

門倉睦男（藤野中央公民館長）、坂庭京（藤野中央公民館）、森川哲郎（沢井公民館長）、谷古宇和也（相模原市立総合学習センター）、大村裕、建石徹、納美保子（下総考古学研究会）、山本典幸（國學院大学）、五十嵐睦（平塚市教育委員会）、今泉克己（有明文化財研究所）、宮田公佳（国立歴史民俗博物館）、大網信良、平原信崇（早稲田大学）、中澤寛将（中央大学）、中川真人、領家玲美（相模原市教育委員会教育局生涯学習部文化財保護課）、調布市教育委員会、相模原市教育委員会、藤野支所、遠藤厚子（地主）

4) 調査日誌抄録

調査日誌抄録

8月2日	機材搬入 草刈り 昨年度の調査区の掘り下げ。
8月3日	昨年度の調査区を確認。 A トレンチを掘り下げ、B トレンチも一部掘り下げる。 A トレンチ西拡張区の南側に D1 調査区を設定
8月4日	昨年度完掘した面まで掘下げ、土嚢を撤去完了。 D1 調査区の南側に D2 調査区を設定。 遺物の点上げを開始。
8月5日	A1・A3・A5 ベルト掘り下げ。D1・D2 調査区掘り下げる。 A トレンチ南拡張区で SI-06 の床面検出。
8月6日	A トレンチ西拡張区の南東壁側のベルトから SI-06 の炉を検出。 発掘体験教室。
8月7日	A トレンチ北拡張区で SI-01 の床面を検出。 A トレンチ東拡張区の東端に SI-03 の石囲い炉を検出。
8月8日	現場説明会。
8月9日	SI-03 の石囲い炉から埋甕を検出。
8月10日	D1・D2 調査区で古代の住居址、SI-05 のプランを確認。 SI-03 の炉を完掘。 SI-06 炉南で完形土器を検出。
8月11日	A トレンチ西拡張区で SI-01 の床面を確認。 SI-01 床面で SK-01 のプランを確認、曾利Ⅲ式の台付土器を検出。 SI-02 にサブトレンチを入れ、掘り下げ、床面検出。 A トレンチ東拡張区で SI-02 の埋甕を確認。 A トレンチ北拡張区でピットを確認。 D1・D2 調査区で確認面まで掘下げ、写真撮影の後、埋め戻し。
8月12日	図面作成 写真撮影 各トレンチ、土嚢を敷きつめ、ブルーシートで養生し、埋め戻し
8月13日	埋め戻し、撤収

5) 2010 年度の調査成果（図 5 ～12）

1. 検出遺構

2010 年度の調査では、SI-01・02・03・06 のプランの確定と各住居跡の新旧関係把握のため、A トレンチおよび北・東拡張区のベルト区の掘り下げを中心に A 調査区全体の確認を行った。さらに、前年度の調査で確認された大形の竪穴住居と思われる SI-05 の範囲を確認するべく、A 調査区南西側に D1、D2 調査区を新たに設定した。各調査区の配置は図 4 調査区略図および図 5 の 2010 年度遺構平面図の通りである。なお、今年度の調査面積は 80 m²となった。

A 調査区からは、前年度の調査までに SI-01・02・03・06 の 4 軒の重複した住居跡が確認されている。その中で最も新しい住居跡が SI-06 であり、住居の範囲は不明であるが、西拡張区において地焼炉と思われる焼土を確認した（図 9）。次に新しい住居跡が SI-02 である。西・南拡張区において住居の立ち上がりを確認しており、SI-01 の床面を切っている。また、SI-02 の東側の覆土中には曽利Ⅱ式～Ⅲ式を中心とした土器と礫が集中して出土しており（図 11）、南壁近くには石蓋状の礫が置かれた埋甕が検出された（写真 7）。埋甕に関しては未調査であり、型式は不明である。また、住居跡の東側半分のプランに関しては未確定の部分があり、来年度の調査となる。SI-01 はその次に新しい住居跡であり、今年度は柱穴と思われるピットを確認した（図 7）。最後に SI-03 は重複している 4 軒の中で最も古い住居跡である。住居のプランに関しては未確定の部分が多く、北拡張区において住居の立ち上がりと床面が確認できる程度であり、SI-01 に切られていることがわかっている。また、東拡張区において石囲埋甕炉が検出され、床面の高さなどから SI-03 の炉である可能性が想定される（図 6）。炉体土器の型式については未調査のため、不明である。その他の遺構・遺物として、西拡張区において SI-01 を切るかたちで SK-03 が検出されており、曽利Ⅲ式の台付甕（図 1・10）が出土した。またその付近に、曽利式であると思われる所属不明の浅鉢が出土している（図 10）。

D1・D2 調査区からは、D1 調査区北側に新しく SI-07 が検出された。前年度では SI-05 は大形の住居と想定していたが、SI-07 が検出されたことなどから、SI-05 と SI-07 の 2 軒の住居跡が重複していることがわかった。また、D2 調査区では SX-19 を検出した。遺構の性格や時期については不明であるが、古代の遺構である可能性が考えられる。

A 調査区における住居跡 4 軒の新旧関係については以上の通りである。しかし、住居の詳細な時期に関しては、埋甕、炉体土器が未調査のため、不明確な点が多く、来年度の調査で解明していきたい。また、出土遺物に関しては昨年度同様に、縄文時代中期の勝坂式、曽利式、加曽利 E 式を中心に出土しているが、現在整理中であり、詳細は正式な報告をもって行いたい。

2. 出土土器（図 1、13）

主に縄紋時代中期中葉から後葉にかけての土器が出土している。

図 1 は SK-03 より出土した、曽利Ⅲ式の台付甕である。口辺部は肥厚帯で、口唇部に 4 単位の把手がつくが 1 単位だけ貫孔された、大形の把手がみられる。胴部にはナデ沈線による大柄の渦巻文が 2 単位つき、その中に棒状工具による条線が充填されている。

図 13 はその他の出土土器である。1~3 は勝坂式である。1 は隆帯上にキャタピラ紋が施文され、その脇に三角押紋が確認できる。2・3 は半裁竹管によるパネル状の区画が施されており、勝坂 2 式にあたる。4 は口辺部の破片資料でキザミ目が入った隆帯が横位に施文され、十字状の意匠がみられる。

5~11 は曽利式である。5・6 は胴部の破片資料であり、条線地紋がみられる。隆帯脇に蛇行粘土紐が貼附されている。7・8 は同一個体の破片資料であり、7 が胴部上部、8 が胴部下半部にあたる。縄紋地紋の上に隆帯を貼り付けた曽利縄紋系の長胴甕と想定できる。9 は頸部の破片資料である。低い隆帯による区画内に櫛歯状工具による条線地紋がみられる。10 はつなぎ弧文系の土器である。口辺部の区画内に列点が充填され、胴部は櫛歯状工具による条線地紋が施されている。11 は曽利Ⅳ式である。口辺部文様帯が欠落させており、胴部に縦コ字状の区画内に矢羽状の条線地紋がみられる。



図 1 SK-03 出土土器

<参考文献>

- 今福利恵 2005 「曽利式土器編年再考—甲府盆地を中心に—」『山梨県考古学協会誌』第 15 号 山梨県考古学協会
- 櫛原功一 1999 「曽利式土器の編年私案」『山梨考古学論集Ⅳ 山梨県考古学協会 20 周年記念論文集』 山梨県考古学協会
- 小林謙一他 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジウム縄文集落研究の新地平 3—勝坂から曽利へ—発表要旨』縄文集落研究グループセツルメント研究会
- 小林謙一 2009 『相模原市藤野町大日野原遺跡 2008 年度発掘調査概要』
- 縄文時代研究プロジェクトチーム 2002 「神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅵ—中期中後葉期 加曽利 E 式土器文化期の様相その 2 土器編年案—」『研究紀要 7 かながわの考古学』（財）かながわ考古学財団
- 永田悠記他 2010 「二〇〇八年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』33 号 中央史学会
- 藤野町教育委員会 1978 『藤野町の埋蔵文化財』
- 藤野町 1994 『藤野町史 資料編上』
- 藤野町 1995 『藤野町史 通史編』

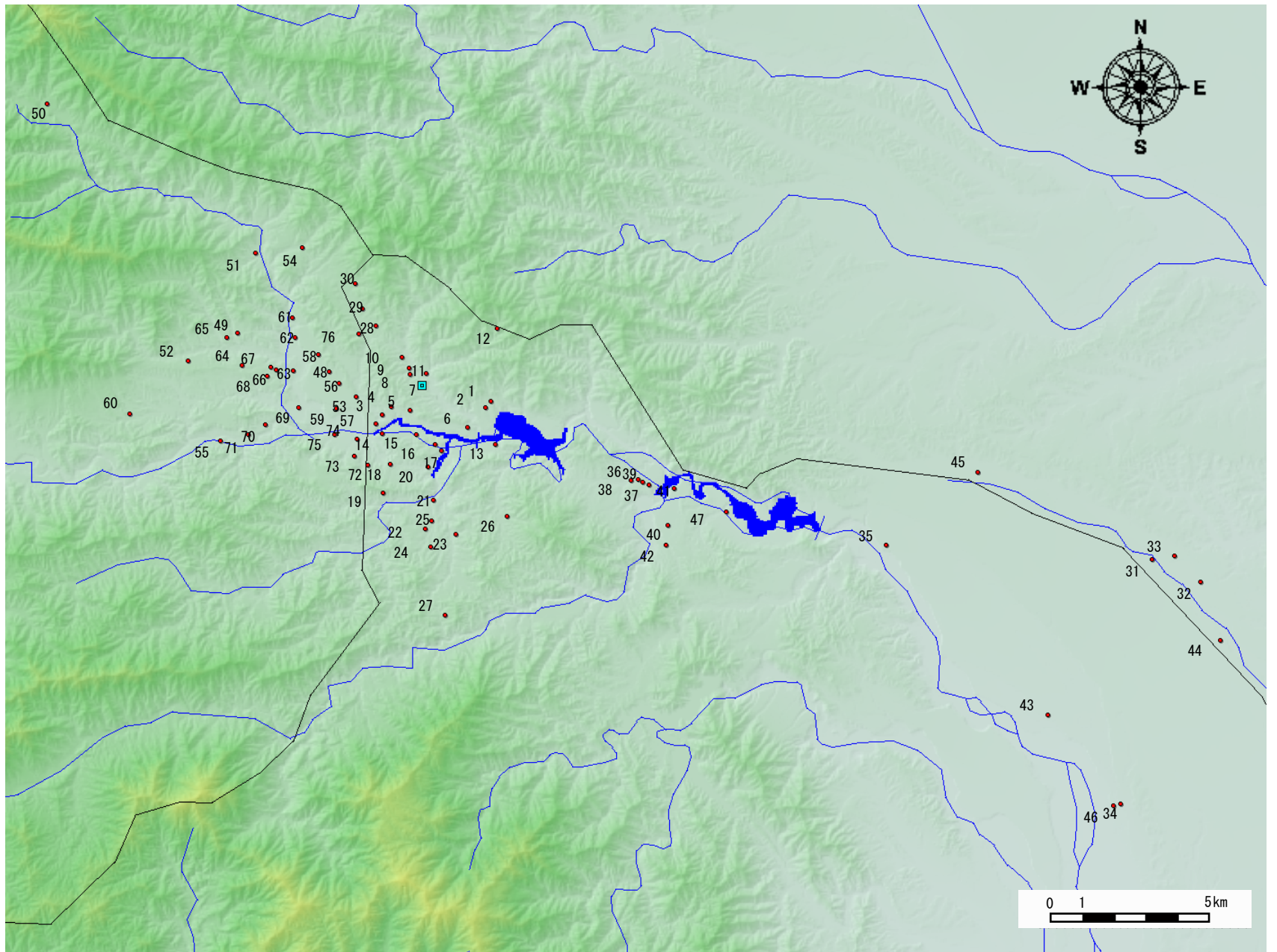


図2 周辺の遺跡

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	天奈遺跡	縄文	26	篠原大割目遺跡	縄文	52	野田尻Ⅰ遺跡	縄文
2	嵯峨遺跡	縄文、歴史	27	菅井尾崎原遺跡	縄文、古墳	53	桜ヶ丘遺跡	縄文
3	上小淵遺跡	縄文、古墳	28	下岩遺跡	縄文	54	穴沢遺跡	縄文
4	下小淵遺跡	縄文、古墳	29	御霊遺跡	縄文	55	川合遺跡	縄文
5	関野道下遺跡	縄文、歴史	30	上岩遺跡	縄文	56	根本山遺跡	縄文
6	与孫原遺跡	縄文	31	山王平遺跡	縄文	57	狐原遺跡	縄文
7	大日野原	縄文、弥生、歴史	32	忠生遺跡A地区	縄文	58	大堀Ⅱ遺跡	縄文
8	小日野遺跡	縄文	33	忠生遺跡B・D地区	縄文	59	関山遺跡	縄文
9	喜佐蔵原遺跡	縄文	34	勝坂遺跡	縄文	60	日留野遺跡	縄文
10	大畑遺跡	縄文	35	大島上ノ原遺跡	縄文	61	向風Ⅱ遺跡	縄文
11	一の尾原遺跡	縄文	36	寸嵐二号遺跡	縄文	62	八米遺跡	縄文
12	千馬遺跡	縄文	37	寸沢嵐石器時代遺跡	縄文	63	上野山Ⅱ遺跡	縄文
13	日連遺跡	縄文、古墳、歴史	38	内郷中学校遺跡	縄文	64	日野富士塚遺跡	縄文
14	漆久保遺跡	縄文、古墳	39	寸嵐一号遺跡	縄文	65	芦垣遺跡	縄文
15	上地敷遺跡	縄文、古墳	40	三ヶ木遺跡	縄文	66	大浜遺跡	縄文
16	中原遺跡	縄文	41	津久井No.62遺跡	縄文	67	南大浜遺跡	縄文
17	小花井遺跡	縄文	42	青山開戸遺跡	縄文	68	大櫛Ⅰ遺跡	縄文
18	向原遺跡	縄文	43	相模原市No.27遺跡	縄文	69	ハッ沢遺跡	縄文
19	日向遺跡	縄文	44	相模原市No.76遺跡	縄文	70	牧野遺跡	縄文
20	芝田遺跡	縄文、古墳	45	橋本遺跡	縄文	71	当月遺跡	縄文
21	馬本遺跡	縄文、歴史	46	磯部宮際遺跡	縄文	72	黒ノ木遺跡	縄文
22	中尾小金谷戸遺跡	縄文	47	川坂遺跡	縄文	73	田代遺跡	縄文
23	中尾皆窪遺跡	縄文	48	上野原小学校遺跡	縄文	74	東区遺跡	縄文
24	大久和戸丸遺跡	縄文	49	大倉遺跡	縄文	75	駒門遺跡	縄文
25	殿地遺跡	縄文	50	原・郷原遺跡	縄文	76	奈須部遺跡	縄文
			51	用竹(殿村)遺跡	縄文			

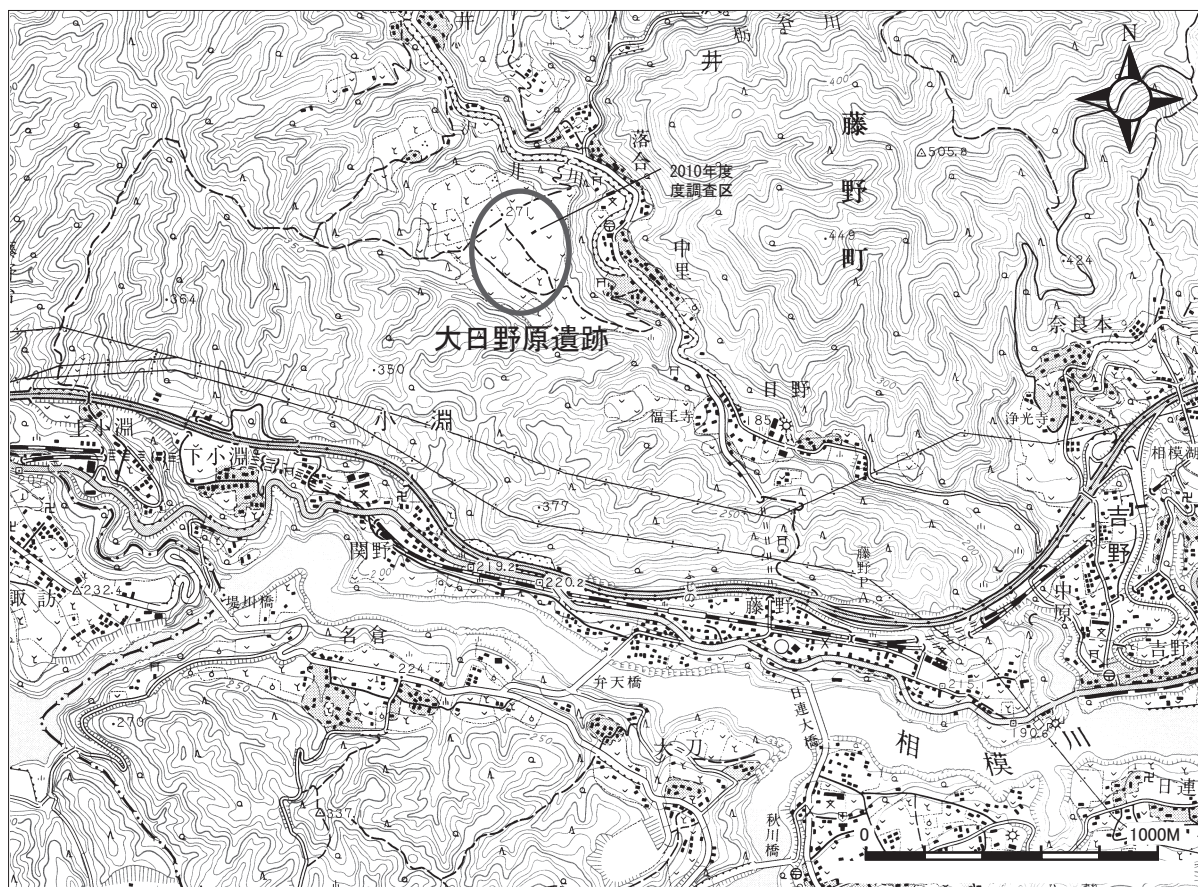


図3 大日野原遺跡2010年度調査区の位置

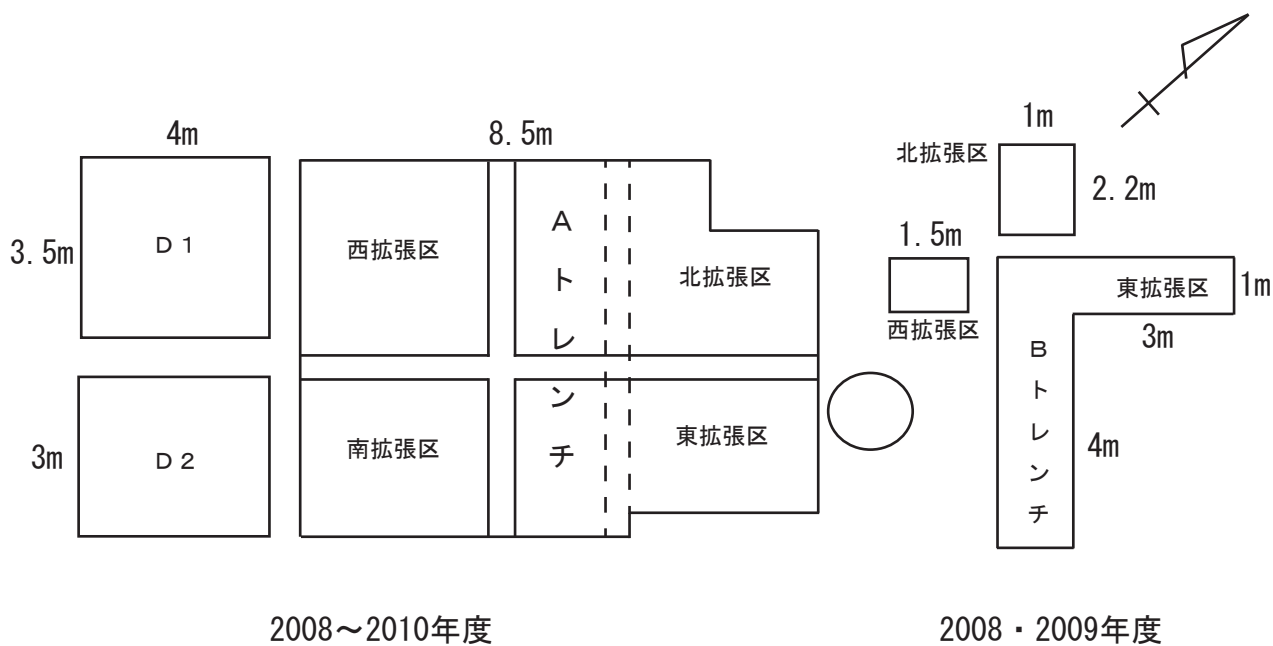
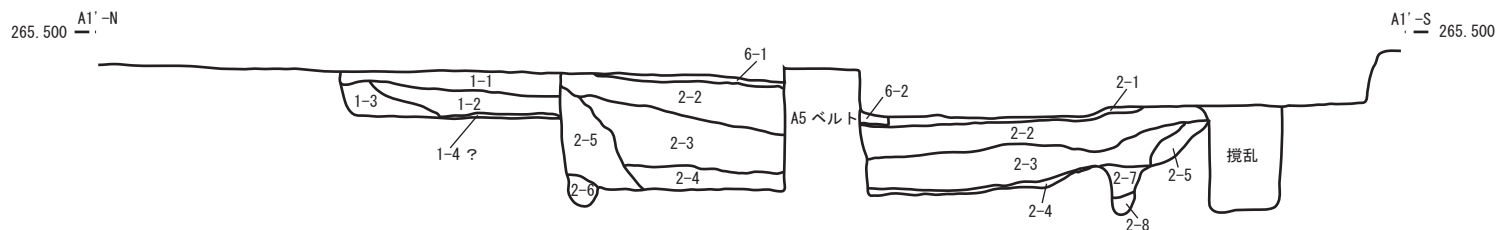
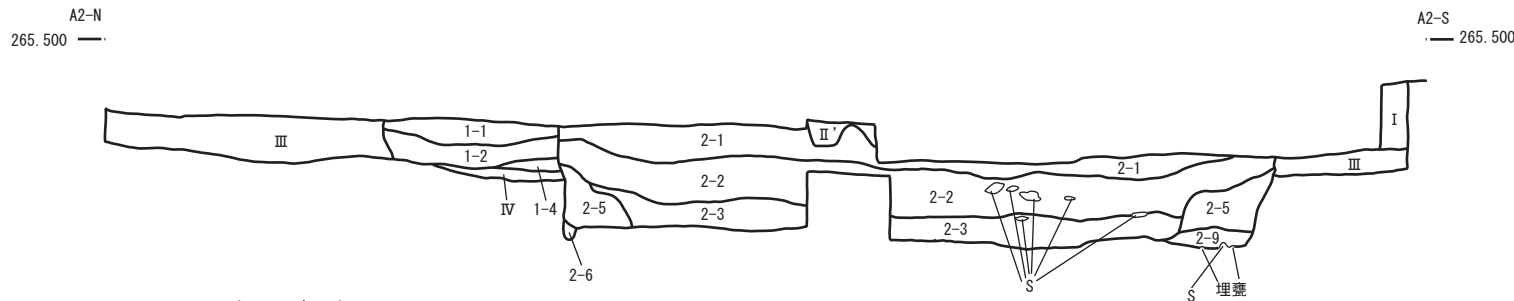


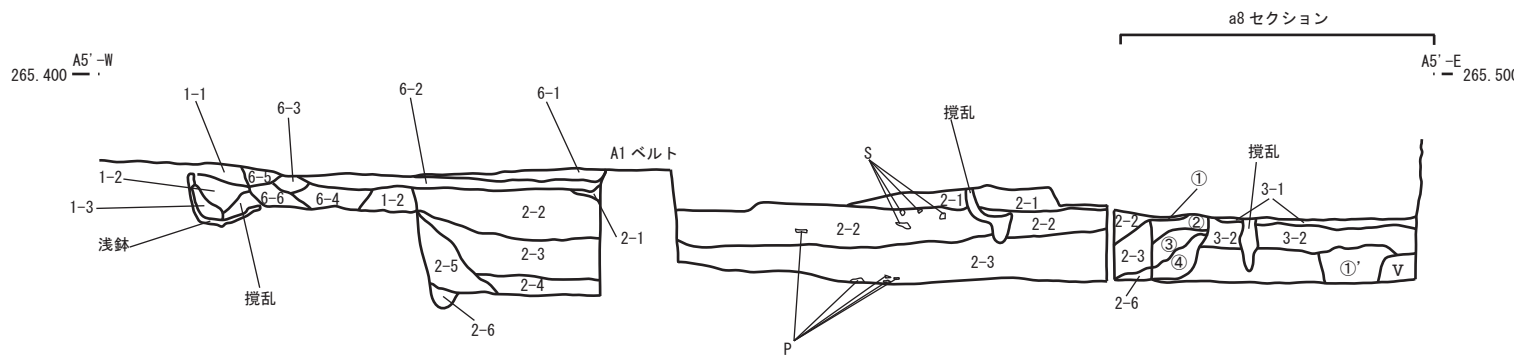
図4 調査区略図



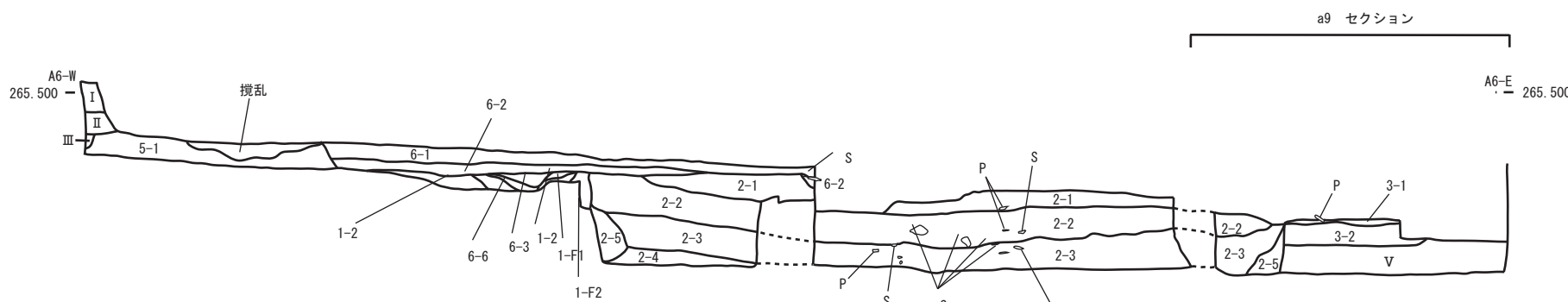
A1' セクション (S=1/40)



A2 セクション (S=1/40)



A5' セクション (S=1/40)



A6・a9 セクション (S=1/40)

図 12 2010 年度セクション図

I 層	10YR3/2 (黒褐) 粘性やや大 しまりやや小 やや柔い ロームブロック 3 ～ 4 mm 30% 下部に直径 12 cm のロームブロックがある	3-1	10YR3/4 褐色土 粘性大 しまりやや大 やや固い 3 住上層 焼土粒 2 ～ 3 mm 2%、黄スコリア 2 ～ 3 mm 5%、炭化物 2 ～ 5 mm 3%、 ロームブロック 5 ～ 8 mm 2%、小礫 3 ～ 5 mm 2%、一部間隙あり
II 層	10YR3/3 (暗褐) 粘性やや大 しまりやや大 やや固い ローム粒 5 mm 3%、焼土 1%	3-2	10YR3/3 ～ 3/4 暗褐色 粘性大 しまり大 固い 下層 黄スコリア 2 ～ 3 mm 8%、炭化物 3 ～ 5 mm 2%、 弱いロームブロック 1 ～ 3 cm 10%、 焼土粒 2 ～ 5 mm 3%、礫 5 ～ 8 mm 1%、間隙少ない
II' 層	ややボンボン B トレの II 層に似るがより柔い		
III 層	10YR3/2 (黒褐) 粘性大 しまり大 固い ロームブロック 2 ～ 3 mm 2%		
IV 層	10YR3/2 (黒褐) 粘性大 しまり大 固い ロームブロック 1 cm 5%	6-1	10YR3/3 暗褐色 粘性やや小 しまりやや大 やや柔らかい ローム粒 2 ～ 3 mm 3%、焼土粒 1 ～ 2 mm 1%、炭化物 1 ～ 2 mm 1%、 小礫 1 mm 1%
V 層	10YR3/3 (暗褐) 粘性やや大 しまりやや小 やや柔い ローム粒 2 mm 3%	6-2	10YR6/4 にぶい黄橙色 粘性やや小 しまりやや大 ごく固い 6 住の貼床 ローム粒 2 ～ 4 mm 5%、弱いロームブロック 3 ～ 5 cm 5%、 焼土粒 3 ～ 5 mm 3% (炉の近くには多く含む)、炭化物 2 ～ 4 mm 2%
1-1	10YR3/4 暗褐色 粘性やや大 しまりやや少ない やや柔い 1 住上層 上部に包含層の 1 層が混ざっている 焼土粒 2 ～ 4 mm 3%、炭化物 1 ～ 2 mm 0.5%、パミス 1 mm 0.5%、 黄スコリア 1 ～ 3 mm 3%、小礫 3 ～ 6 mm 5%、間隙少ない	6-3	10YR3/4 明褐～褐 やや柔い しまりやや少 粘性やや大 F2 ～ 4 mm 3%、C1 ～ 2 mm 2%、やや大きい C (5 mm) も 0.5%、 黄 S1 ～ 2 mm 3%
1-2	10YR3/3 暗褐色 粘性大 しまり大 固い 1 住下層 焼土粒 1 ～ 4 mm 3%、炭化物 1 ～ 2 mm 2%、小礫 3 ～ 5 mm 1%、 黄スコリア 2 ～ 3 mm 3%、粘土?パミス 1 ～ 2 mm 0.5%	6-4	10YR3/4 明褐～褐 やや柔い しまりやや少 粘性やや大 F2 ～ 4 mm 1%、C1 ～ 2 mm 2%、やや大きい C (5 mm) も 0.5%、 黄 S1 ～ 2 mm 3%
1-3	10YR4/3 明褐色 粘性やや小 しまりやや小 やや柔い 1 住壁土 焼土粒 3 ～ 5 mm 3%、炭化物 1 ～ 2 mm 1%、 黄ローム粒 2 ～ 4 mm 10%、弱いロームブロック 1 ～ 3 cm 10%、 小礫 1 mm 0.5%、間隙少しあり	6-5	S1-06 炉上の土 (前のセクションにない) 6-2 に似る 10YR3/3 暗褐色 粘性やや少 しまりやや大 やや固い FR2 ～ 3 mm 1%、C2 ～ 6 mm 2%、黄 S2 ～ 3mm3%、白パミス 1 mm 1%
1-4	貼床 10YR3/3 ～ 3/4 暗褐色 粘性大 しまりごく大 ごく固い 黄スコリア 1 ～ 3 mm 5%、焼土粒 3 ～ 4 mm 3%、 炭化物 1 ～ 2 mm 1%	6-6	5R3/5 赤褐色 焼土ブロック やや柔い しまりやや大 粘性やや少 F80%、C1 ～ 2 mm 3% 残りは炉 1 の土がブロック状に混ざる
1-F1	5R5/6 赤褐色 粘性なし しまり大 固い 焼きしまる 焼土 2 ～ 30 mm 80%、C1 ～ 4 mm 2% わずかに褐色土をブロック状に含む		
1-F2	10YR3/3 粘性やや少 しまりやや大 やや固い 間隙わずかにあり FR2 ～ 4 mm 4%、小礫 2 ～ 4mm3%、LB2 ～ 3 cm 5%、 LR2 ～ 4 mm 10%、C3 ～ 6 mm 3% 炉の下部または炉体土器の抜き取り痕か	①	10YR3/4 褐色土 II' に似る 粘性やや大 ややしまる やや固い 白パミス 1 mm 1%、黄 S2 ～ 4mm3%、砂利 2 ～ 4 mm 1%
		②	10YR4/3 やや明るい褐色土 1-1 に似る 粘性やや少 しまりやや大 やや柔い FR2 ～ 3 mm 1%、黄 S3 ～ 5mm3%、C3 ～ 8 mm 1%
2-1	10YR3/4 暗褐色 粘性やや大 しまりやや少ない やや柔い 2 住上層 上部に包含層の I、II 層が混ざっている 焼土粒 2 ～ 4 mm 3%、炭化物 1 ～ 2 mm 0.5%、パミス 1 mm 0.5%、 黄スコリア 1 ～ 3 mm 3%、小礫 3 ～ 6 mm 5%、間隙少ない	③	10YR3/4 褐色土～明褐色 1-2 に似る 粘性やや大 しまり大 やや固い FR2 ～ 3 mm 2%、C2 ～ 5 mm 1%、LR3 ～ 5 mm 5%、弱い LB1 ～ 3 cm 5%
2-2	10YR3/3 暗褐色 粘性大 しまり大 固い 2 住上層 焼土粒 1 ～ 4 mm 3%、炭化物 1 ～ 2 mm 2%、小礫 3 ～ 5 mm 1%、 黄スコリア 2 ～ 3 mm 3%、粘土?パミス 1 ～ 2 mm 0.5%	④	10YR4/6 黄褐色～明褐色 粘性やや少 しまりやや大 固い 間隙有 LB2 ～ 5 cm 30%、LR2 ～ 5 mm 10%、C1 ～ 2 mm 1%、 FR2 ～ 3mm3%、小礫 3 ～ 5 mm 1%
2-3	10YR3/3 暗褐色土 粘性大 しまり大 固い 2 住中層 黄ローム粒 2 ～ 5 mm 4%、焼土粒 2 ～ 3 mm 2%、 ロームブロック 5 ～ 8 mm 5%、炭化物 2 ～ 5 mm 2%、 わずかに間隙あり 小礫 3 ～ 5mm 3%		
2-4	10YR3/4 褐色土 粘性やや大 しまりやや大～中 やや固い (やや柔め) 2 住下層黄ローム粒 2 ～ 3 mm 5%、ロームブロック 5 ～ 8 mm 3%、 黒色粒 5 ～ 8 mm 3%、ロームブロック 2 ～ 4 cm 5%、 炭化物 2 ～ 3 mm 1%、焼土粒 1 ～ 2 mm 0.5%、小礫 1 ～ 2 mm 1%		
2-5	10YR4/3 ～ 3/4 やや明るい褐色 粘性やや大 しまり大 固い 2 住壁土 ローム粒 2 ～ 3 mm 5%、ロームブロック 1 ～ 3 cm 5%、 炭化物 1 ～ 2 mm 1%、焼土粒 1 mm 0.5%		
2-6	2 住周溝 10YR2/2 ～ 2/3 黒褐色 粘性大 しまりやや大 やや固い LR2 ～ 3 mm 3% C1 mm 0.5% FR1 mm 0.5% 黄 S2mm1% ベースは 2-5 層		
2-7	10YR3/3 褐色土 粘性やや大 やや固い 間隙有 LR2 ～ 3mm5% 弱い LB1 ～ 2 cm 2% C1 ～ 3 mm 1%		
	2-3 に似るが弱くロームブロックを混入		
2-8	10YR2/3 黒褐色 LR2 ～ 5mm10% LB3 ～ 4 cm 30% 2-7 層に地山を多く混入 地山の再堆積		
2-9	10YR3/4 褐色 粘性大 しまり大 やや固い わずかに間隙有 FR2 ～ 3 mm 1% LR2 ～ 5mm3% LB3 ～ 4 cm 3% LB は完全なかたまり状 C2 ～ 6 mm 3% 小礫 3 ～ 5 mm 1%		
	A6 面の 2-9 層に似るが完全な炭化材はない		

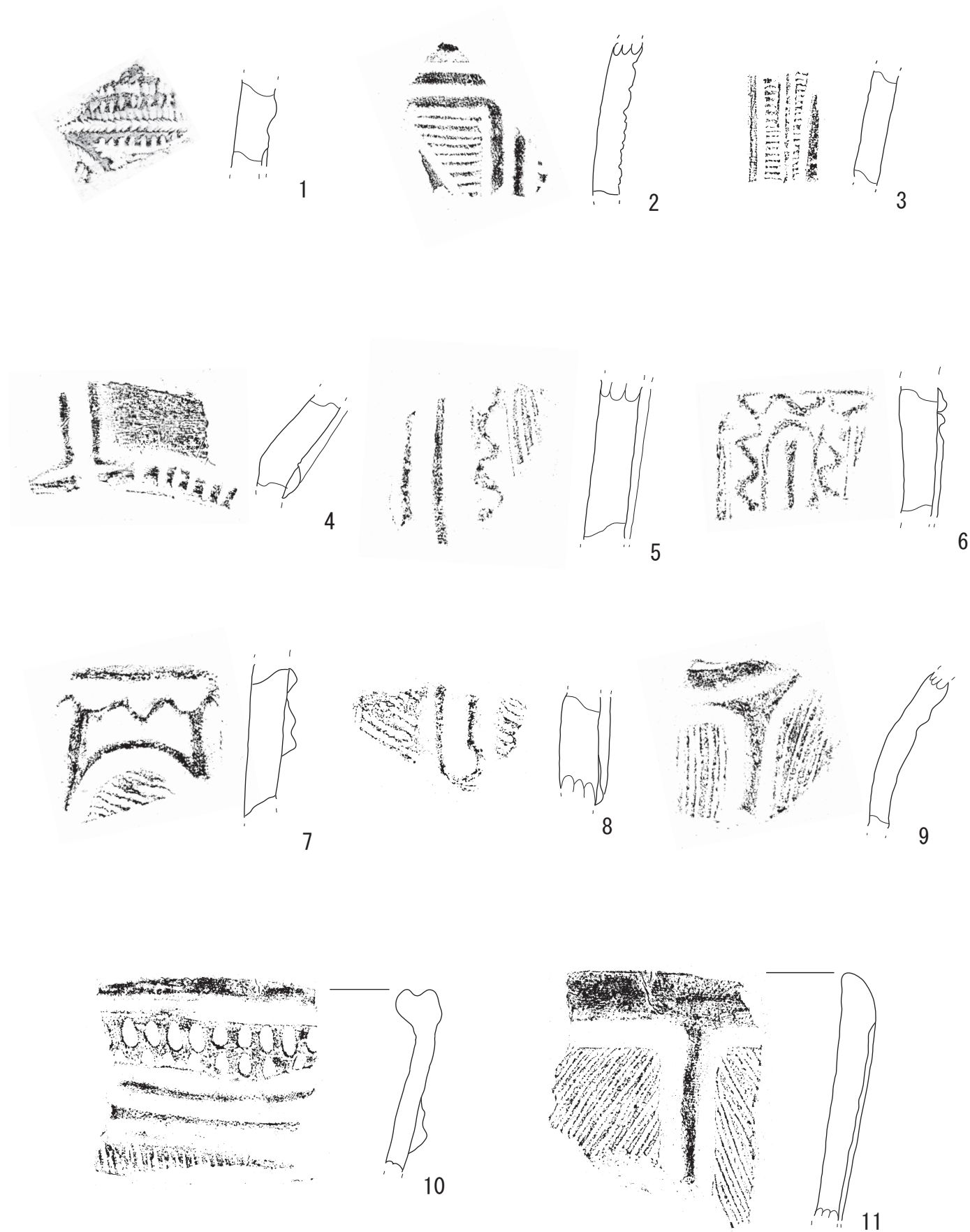


图 13 2010 年度出土土器

0 10cm
 (1/2)



写真1 SK-03 出土土器



写真2 出土土器



写真3 発掘風景



写真4 遺跡全景



写真5 現地説明会



写真6 SI-02 覆土中土器集中



写真7 SI-02 埋甕



写真6 SI-03 石囲埋甕炉



写真7 SI-01 浅鉢・SK-03 脚台付深鉢



写真8 集合写真

大日野原遺跡 2010 年度発掘調査概報

印刷・発行日 2011 年 3 月 31 日

編集・発行 中央大学文学部 小林謙一

〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1
